

No.30 パトリック・ヴィレール 「人間肘掛け椅子」

Patrick Vilaire

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 8 月 1 日付 立川市市報記事より

ヴィレールはハイチの作家。ファーレ立川の計画のときは、ハイチは戒厳令下にあり、作品の輸送はもちろん、連絡もままならなかった。その結果、作品はカナダの美術館にある作品を譲っていただくということになった。アクロバチックな作業が続いた。

作品は権威に対する厳しい眼差しによってつくられている。さらに椅子の背もたれにある眼そのものが権威のもつ恐ろしいものとなっている。

ファーレ立川オープンするとき、ハイチは戒厳令が解かれ、ヴィレールがやってきた。そして久しぶりに自分の作品と対面した。自由の身になった人と、人類の自由の証であった美術作品との対面を目の当たりにした経験は忘れがたい。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

これは 1986 年ハイチで、そして 1989年パリのポンピドーセンターの近代美術館における“大地の魔術師”展で発表した“権力”をテーマにした彫刻の6点シリーズの一つです。

1980年以来、私は自国ハイチの文化に関連したテーマで制作しています。

以前、“攻撃性”というテーマで制作したことがあります。神話や民間伝説を調べた結果、私は“鳥”を象徴的な要素とする彫刻言語を引き出すに至りました。

“権力”というテーマは政治的問題から生まれたもので、権力が(彫刻)のコンセプトになっています。

私は椅子、玉座、肘掛け椅子を象徴として使いました。私は、人間の心理における権力という概念を、人間の伝統を通して考え、玉座について行った研究をもとに、肘掛け椅子に造形表現を与えました。“人間肘掛け椅子”では、特に、象徴表現が強調されています。

私は、この人間肘掛け椅子そのものが人間の象徴的表像であり、人間が人間に対する最高支配の表現であるように望みました。

私の造形作家としての歩みは単純なものです。私は自分の文化的体験から出発し、根源的地点から、できるだけ多数の人々の心を動かそうとしています。

作品は、模型の形で表現されたグラフィックの習作から生まれ、最終的には造形的形態として姿を現します。

私にとって、書籍による研究は、テーマのひとつひとつ(注)を深めるために常に必要となります。私の作品が最大多数の心に触れるものであることを、私は夢見ています。

(注) “死についての省察、象徴的彫刻”という死をテーマとした私の全作品は、1994年10月にブラジル・サンパウロの第22回ビエンナーレに出展されます。